

特集：
「しあわせな風景」
に想う



しあわせな風景
×
デザイン JAPAN
JUDI 20th Anniversary

発行：
都市環境デザイン会議
広報委員会
東京都文京区本郷
2-35-10 本郷瀬川ビル
〒113-0033
tel.03-3812-6664
fax.03-3812-6828
<http://www.judi.gr.jp/>

「しあわせな風景」に想う

堀口浩司 Horiguchi Koji 地域計画建築研究所(アルパック) 20周年記念事業委員長

このたびの東日本大震災により亡くなられた方々のご冥福を謹んでお祈り申し上げるとともに、被災された方々そしてそのご家族の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

国内観測史上最大の地震と、これにより誘発され東北から関東の太平洋岸の広範な地域をおそった巨大津波は市民の生命と財産、市街地や市民生活に大きな打撃を与えました。さらに原子力発電所の被害による電力不足と上下水道といったライフラインへの打撃、港湾、鉄道、道路などのインフラ被害による物流の停滞といった事態が発生し、まさに戦後最大の危機的状況を迎えつつあります。

このような大災に際し、都市環境デザイン会議(以下JUDI)の皆さんは、都市や地域空間に関わる専門家・デザイナーの責務として、また大規模災害を経験した当事者として、日本の都市空間やシステムの脆弱さ反省するとともに、被災地の復興や市民生活の回復に向けて真摯にとりくみ支援して行く責務があるとおもいます。

20周年記念事業のテーマ

都市環境デザイン会議20周年記念事業委員会では、記念事業全体のテーマを「しあわせな風景×デザイン JAPAN」としました。これを選んだ20周年記念事業委員会と代表幹事会の席上では、これは一過的なイベントのテーマではなく、これからの中の都市デザインの方向を示す言葉としたい。地域の個性や日本らしいデザイン、西洋モデルからアジアのデザインへと新しい展望を示したい。といった思いが込められています。更に都市環境デザインに関わる我々の仕事が、表層的なデザインや場所づくりにとどまらず、「景観から情景へ」「つくるデザインから維持するデザイン」などますます多様な広がりを持っていることを示しています。このテーマを決めたのは2009年10月で、その時にはこのような展開が待っているとは誰も考えてはいなかつとおもいます。

●特集：「しあわせな風景」に想う

1.「しあわせな風景」に想う	01
2.北海道のしあわせな風景	03
3.JUDI琉球ブロック 20周年記念事業中間報告	09
●寄稿：コミュニティーアーキテクトについてー	12
●寄稿：21世紀は環境デザインの時代	15
●国際委員会報告	15
●事務局より	16

「しあわせの都市」

阪神淡路大震災を経験した民俗学者の森栗茂一(大阪大学)は、自ら育った長田区の地蔵盆に関して、「しあわせの都市はありますか—震災神戸と都市民俗学」(1・17市民通信ブックレット)の中で、このように書いています。

長田区西代通では、がれき中から地蔵さんの破片が掘り起こされた。被災後、住民は避難所や郊外の仮設住宅にうつり、地域には僅かに残った高齢世帯だけが住む。しかし復興過程で住民が少なくなつても地蔵盆は続けられた。「前おった年寄りは帰つてこれんやろか。無理でも、時々は帰つてきてほしいなあ。戻つてきて、地蔵さん見たら、励みになるやろな。せめて年にいっぺんの地蔵盆にでも来て、みんなの顔を見たら元気になるやろうになア」

復興土地区画整理事業の中で、人々が長期に地域を離れて生活し、その中で次第に地域との関わりが薄れてゆく。また同じ地域の中でも復興の同じ目標に向かって、日々の生活を過ごすことに我慢できないものも出てくる。そこでは地域で祭祀ができなくなって、地蔵を神社などに預けるところも出てくる。森栗は「都市計画事業地区の中では、まちづくりの展望が見えたところでは、地蔵を町の核として位置づけることができる。これに対して、計画が遅れたり、展望が見えないまちでは、地蔵を祭る気力が失われてしまう」のである。また地蔵は「寺にまつられている仏像とは違つて、村の辻や町の路地にまつられ、土地と暮らしに密着している。境神(さえのかみ)や地神の信仰との結びつきもある」として、大衆の願いを聞き入れる地の神としている。土地区画整理事業という都市の「器」を作りながら、地蔵という地域の「魂」も必要ということでしょう。

JUDI の成長と変化

JUDI が発足した1991年はバブル経済が崩壊していくとは言え、まだ美しい都市づくり、優れたデザインの土木構造物や新しい都市空間をつくろうという強い意志が日本の社会や専門家の意識の中に満ちていました。徐々に時代が落ち着いてきて、単なるハードな装置や空間づくりにとどまらず、市民や専門家、作り手と使う人など多様なステークホルダーと共に作る関係性を重視するようになります。また都市空間から地方部や田園地帯を含んだ、より大きな計画領域を取り扱うようになってきました。

その一方で、実際のものづくり・空間づくりの現場は少しずつ縮小し、空間形成に関わるまちづくりやルールづくりや条例などのシステムづくりなど、最終的には美しい空間づくりを目標としながらも、そこに至るさまざまなシステムを対象とするソフトな仕事も多くなってきました。

このように都市環境デザインの世界は、都市から環境へ、ハードから空間づくりにかかるソフトな分野へと発展をしつつあり、従来の JUDI の枠組みに収まらない人も多くなっています。そのため、実際に「都市を創る仕事」をする若い人の中には、今の都市環境デザイン会議のありように違和感を感じる人も少なくないと思います。

このように JUDI が果たしてきた過去の蓄積を評価しつつも、未来に対する新しい展開を期待しつつ、「しあわせな風景」が日本をデザインするというタイトルとしました。JUDI の活動はそれぞれの地域の活動の積み上げであることから、同じコンセプトで各地域が個性的な取り組みを行いつつあります。

20周年記念事業の基本マークは、昨年5月に宮沢功さんの監修の元、野口正治さんにデザインして頂きました。当初の説明は「人と人が結ばれる会議」というコンセプトでしたが、この人らしき像が火や木や大などの文字となって自然的な要素を表しているように見えます。人と人、人と自然の多様な関係を表しており、これから都市環境デザインを象徴する素敵なものになりました。

「しあわせな風景」はそれぞれの町や村に存在し、その土地とそこで生活する人の中で育まれた風景です。日本の至るところにある「しあわせな風景」を大切にし、あるいは再生し、新たに創ってゆくことが我々の使命であると信じています。

20周年記念事業の委員と代表幹事のみなさんを代表して。



撮影 平成23年4月11日

北海道のしあわせな風景 —JUDI北海道ブロック・20周年記念事業—

高森篤志 Takamori Atsushi 株式会社ソフトスケープ 北海道ブロック幹事

JUDI 北海道ブロックでは、20周年記念事業として、「北海道の幸せな風景」と題したシリーズ企画を行っている。

北海道で、この20年間にどのような取り組みがあつたのか。その結果、どのような風景が生み出されたのか。それを踏まえて、今後どのように「北海道のしあわせな風景」を見出していくのか。このような考えのもとに、北海道で土木、建築などに取り組む専門家を招き、話題提供と会場とのディスカッションを行う「JUDI サロンシリーズ」を開催している。これまで、サロンを2回開催し、今後は1回のサロンと、全体を総括するシンポジウムを行う予定である。

また、このシリーズの裏テーマとして、「若手の参加」がある。大学で建築やデザインを学ぶ学生、社会人としてスタートしたばかりの若手デザイナー、プランナーを巻き込み、これから20年に向けた下地づくりとする狙いである。JUDIも設立当初から20年が経ったわけで、当時若手だったはずの自分も、もう若いとは言われなくなった。年々、平均年齢が高まる北海道ブロックに若い人たちの参加を促し、新しい感性を吹き込んでもらいたい。

■これまでの JUDI サロンの概要

○第1回JUDI サロン

テーマ:「北海道の風景づくりーこれまでとこれからー」

登 壇:酒本 宏氏(株式会社 KITABA)

:辻井 順氏(株式会社ホルス)

司 会:高森篤志(株式会社ソフトスケープ)

場 所:cafe me, we. (カフェミワイ)

日 時:平成22年10月29日(金曜日)18:30~21:00

参加者:参加者数32名(一般20名、学生12名)

※登壇者、運営スタッフ含む

○第2回JUDI サロン

テーマ:「風景づくりの現在(いま) 一現状と課題、デザインの現場、そして景観研究ー」

登 壇:松田泰明氏 福島秀哉氏

(独立行政法人土木研究所寒地土木研究所
地域景観ユニット)

コメント:橋場 光氏(株式会社 KITABA)

司 会:高森篤志(株式会社ソフトスケープ)

場 所:かでる 2・7

日 時:平成22年12月7日(火)18:30~21:00

参加者:参加者数45名(一般30名、学生15名)

※登壇者、運営スタッフ含む

**第1回 JUDI サロン
北海道の風景**

—これまでと、これから。—

北海道デザイン環境（JUDI）は今年 20 周年を迎えるました。JUDI 北海道ブロックでは、20 周年企画企画として、JUDI リレー「北海道のしあわせな風景」をシリーズ開催いたします。今まはその第 1 回、ミックオフ企画ということで、JUDI 北海道ブロックの幹事である酒本宏氏がスピーカーをおこないます。また、都内、建築など様々な分野におけるこれまでの 20 年を振り返るとともに、これから北海道の風景づくりについて、会場のみなさんとおみ物を手にリロン形式で意見交換を行いたいと思います。

日時：2010年10月29日(金) 18:30～20:30
場所：cafe me, we.
札幌市中央区1条1丁目水辺ビル3F
011-219-7025
会費：1000円(学生500円)
1ドリンク・1タパス付

スピーカー：酒本宏氏(株式会社 KITABA)
辻井順氏(株式会社ホルス)
コーディネーター：高森篤志(株式会社ソフトスケープ)
(JUDI 北海道幹事)
参加申し込み：株式会社ソフトスケープまで
お名前と所属、連絡先を Mail
か Fax でお届けします。(担当：高篠)
FAX:011-706-1109 (TEL:011-706-1119)
MAIL:takamori@softscape.co.jp
株式会社ソフトスケープ
札幌市北区北13条西3丁目13番地13号ビル2F

JUDI サロンシリーズ

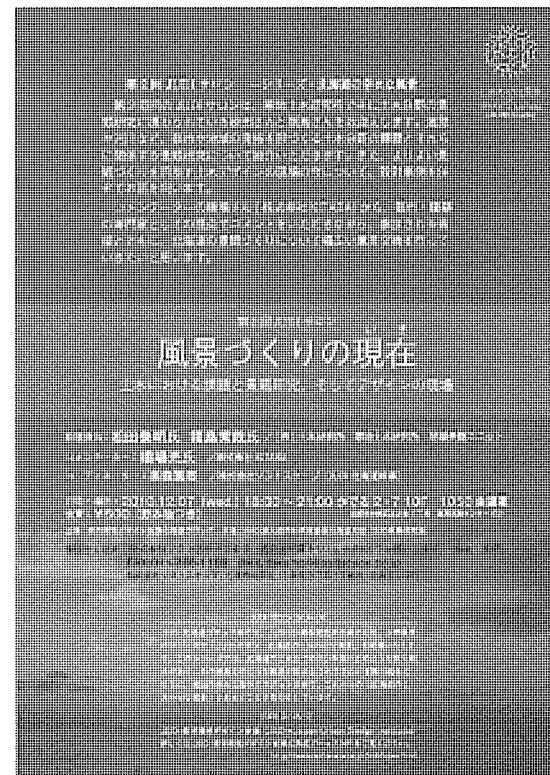
JUDI 北海道ブロックでは、JUDI 20 周年の名所として、3 週程はクリニック、JUDI サロン、北海道のしあわせな風景、を実施いたします。このシリーズでは、北海道でこれまで 20 年間にどのような取り組みが行われたのか、どのような風景が生まれてきたか振り返るとともに、最近の新たな動きにスポットを当て、これが後の「北海道のしあわせな風景」を見出すことを目的としています。

JUDIについて

JUDI 都市環境デザイン研究所 (JUDI-Japan Urban Design Institute)
都構想デザイン企画会議は、わが国の都市空間デザインを取り戻す使命を掲げ、よりよい都市環境を形成していくために、都構想デザインには関わる総合的な立場の人材を育む所となり、またアートワークの構造や情報交換等を通じてなる新しい組織として、2001年5月に設立されました。また、2010年1月5日に日本子会社の株式会社ソフテックとして設立されました。(JUDI 都市環境デザイン研究所(日本))

北海道ブロックでは、JUDI 10 周年企画として「北海道のしあわせな風景」フィトリオを立ち上げました。ぜひみなさまが興味ある企画をお気軽にご来場ください。

詳しくは JUDI のウェブサイトをご覗きください。
<http://www.softscape.co.jp/jud/index.html>



■第1回JUDI サロン

「北海道の風景づくりーこれまでとこれからー」

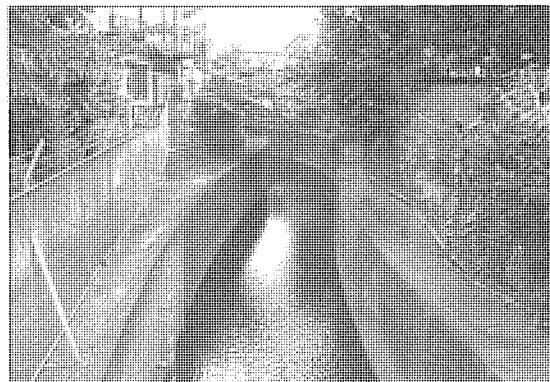
○社会資本のデザインを振り返って(酒本 宏氏)

網走駅の写真です。電話ボックスに衝撃をうけました。網走駅に出張で行ったときに、これが薄暗く光って

いました。「こんなものが実際にあるのか」と感じたのが私の景観に関わるスタートなのかもしれません。



高度経済成長時代は、標準設計に沿った設計が全国的に主流でした。たとえば河川だと洪水の確率によって、流量が決まり、断面が決まるというというもので、護岸の材もコンクリートと決められていました。そのようなときに出来た河川の代表的なものがこれです。

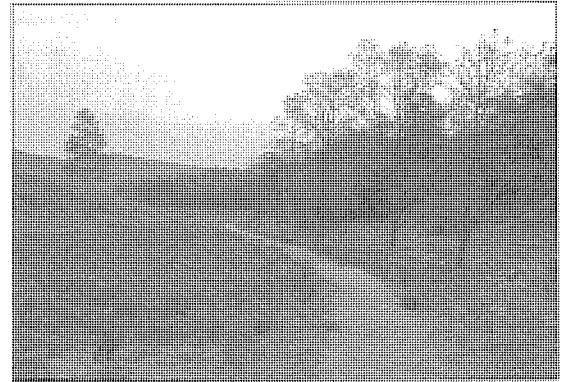


1980年代になると、私も土木分野で景観設計をはじめました。この時代は「景観」という言葉だけがどんどん暴走し出して、勘違いのデザインもどんどんできました。そのひとつが「らしさ」の勘違いです。「地域らしさ」を直接的に表現しようという動きがあり、景観設計に関して知識のない行政や土木技術者に任せたところ、このような景観が出来上がりしました。



平成10年ぐらいの後半からは少し落ち着いてきて、街灯に過剰な装飾をするなどのお化粧は、公共事業の中では少なくなっていました。そうした中でようやく景観について、美しい社会資本についても考えられる時代になってきたと思います。さらに、景観をつくるためには、周りの人たちの景観に対する意識を高めなくてはいけないということで、これからは市民の方々にも

参加してもらい、じっくり景観について考えていくからと思います。



ここは私と高森さんがデザインした河川です。地域の方と一緒に、人の動きや生物たちにも配慮してどんな川にするのかを考えながら進めました。この川をデザインするにあたって、「どこをデザインしたのかわからない」ということをテーマにしました。デザイン的にまったく考えていないというわけではなく、1年に一回水が浸る所と3年に一回ぐらい浸る所の植生は違うといったところに着目して、その間に散策路を通すなどの計画もしました。

景観を売りにしている小樽です。歴史的建造物の道路一本外れたところにこのようなマンションが建っています。「小樽の景観をあなたのものに」というキャッチコピーがあったりするのですが、その景観を壊しているのがこのマンションだったりもします。こういう問題はこれからもたくさん出てくると思いますが、景観法という道具を手に入れた私たちがこれからどういう景観を作っていくか、というのが北海道に課せられた大きな課題だと思います。

○20年の背景を概観して(辻井 順氏)

都市のデザインではいろんな面が出てきました。「成長から成熟へ」ということを受けて、「もう少しコンパクトにならないともたいないだろうか」ということが考えられるような時代になってきました。

環境面では負荷を減らしていくこうとう意識が高まり、色々なものを使いまわしたり、あるいはもっと上手に使っていこうという考えが出てきています。

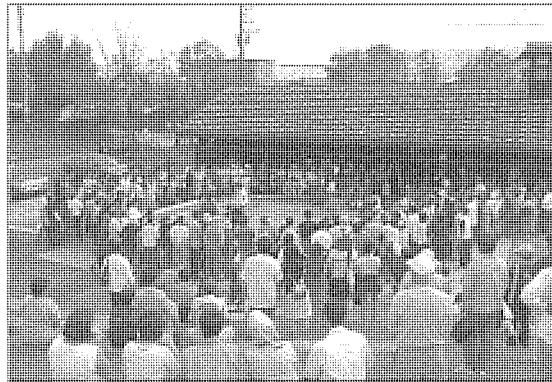
景観法ができて、「美観」という考え方から総合的な「景観」に転換してきました。お化粧の文化ではなく、中身と合致した生活文化を反映させよう、身だしなみからきちんとえていこうという時代になってきました。

都市を作る過程では、住民に対して説明会を開く形から、作る前にいろいろ議論してから、一緒にプロセスを作っていくこう、そういうものを社会の皆さんに報

告していく動きが大切なように感じます。

ここからは事例をお見せして説明したいと思います
テーマを「幸せのかけら」として事例を紹介します。

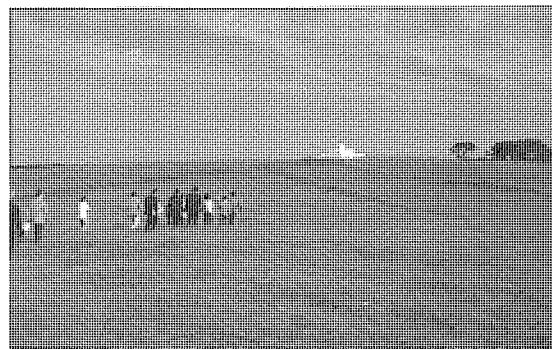
石狩市にある弁天歴史公園という場所です。こう
いったものを積極的に用意してリフレッシュの場にし
よう、という動きはここ20年間で出てくるようになり
ました。これは鮭のつかみ取りをしている様子です。従
来は浜でやっていたものですが、市街地にこのような
活動を取り込んでいこうという動きから始まった催
ごとです。



北海道では、庭でジンギスカンを食べる、あるいは本
州から来た人をすぐに招き入れたりするという事がよ
くあります。北海道は集まって過ごす事が多いのだ
と思います。集まって過ごすということが「幸せの形」
になっていくのだと思います。



延々と市街地が続く、あるいは谷あいだらけの地形と
は違って、一步に外に出ると田園風景が広がっています。
しかもそれが日常の都市生活の延長から味わえる、とい
うところから見て北海道の都市デザインはそういう部
分も含めて考えていく必要があると感じています。



空間を作る時、いい空間を作つて、それ以外はメリハ
リをつける。覗く、滑る、動きを作る、このような遊び心

を大事にしたいです。そのような気持ちで都市のデザ
インに携わっていく。そういうことが大事になってい
くと思っています。

○会場の意見から

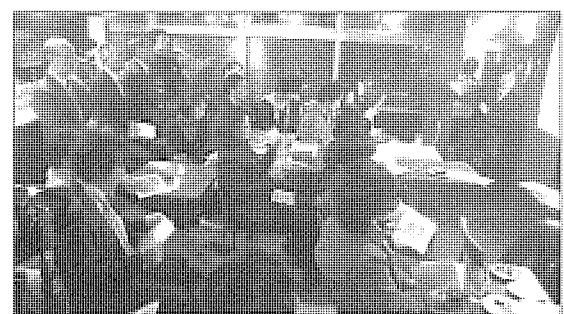
会場：古い街並とか歴史があるところは、景観設計等デザ
インのコードを決めていなくても、昔の暮らしの中
から地域で暮らしやすい形から景観ができていって、
それが「しっとりして心地いい」という部分があったの
だと思いますがいかがでしょうか。

辻井：街並に現れている形が、何故そうなっているの
かをきちんと見ないと、上っ面だけのルールになってしま
います。ルールをつくるのであれば「暮らし振り」に支えられたものにしていくことが大事です。地域の
節度とは「身だしなみ」のようなものだと思っています。
無理しても仕方がないのです。身だしなみを整える、奇
をてらったものは作らない、生活がそのまま出ている
のがマチだと思います。

会場：今、大学4年生で卒論を書いています。北海道の
景観に関する卒論です。私が問題意識として抱えてい
るのは、今日論じられていることです。北海道の景観は
美しいと評価されています。美瑛の丘の風景や田園風
景です。一方、市街地の景観が重視されていない、意識
がいっていないと感じています。北海道の市街地の景
観を考えていく時に、北海道の自然地形など、もともと
あるものを活かしてマチの景観を作っていくことができ
ると思っています。

会場：北海道の景観で特徴的なのは、「引き算をする」、
「余計なものを無くせばよくなる」ということを前提で
話していることが多いと思います。それが景観検討の
主軸になっている。自分が個人的に感じているのは、本
州の人は「良いものをつくらないと景観はよくな
い」という前提で話をします。今までやってきた余計
なことを無しにすればよくなるという意識でやられて
いるように思うので、それはちがうと感じています。

酒本：今日は、これまでの20年を振り返りながら、「駄
目なものは駄目」とみんなで共有する機会だと思っ
ています。その上で「北海道のこれからをみんなで考
えていければいい」という思いが有ります。第2世代と言わ
れる自分たちが50歳に近くなってきたとき、次の世代
にバトンタッチしなければならない。「駄目なものは駄
目」、「いいものはいい」と評価してやっていくのが大
事だと思います。



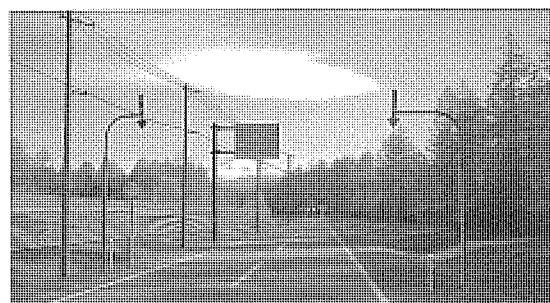
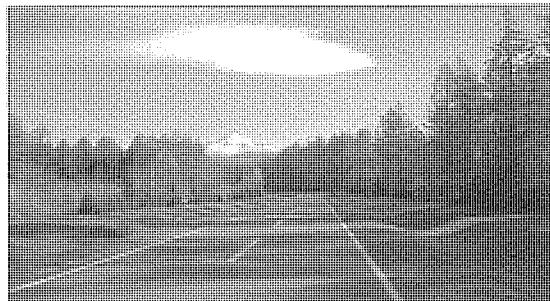
■第2回JUDI サロン
「風景づくりの現在 ー現状と課題、デザインの現場、
そして景観研究ー」

○土木における課題と景観研究(松田泰明氏)

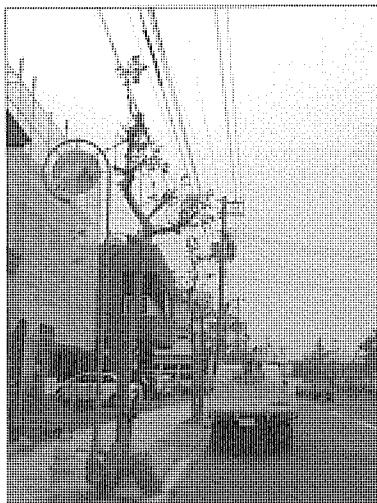
北海道の主な産業は3つあります。建設事業、農林水産業、観光です。これまで大きかった建設事業、農林水産業が減っていく中で、北海道の経済は、観光の部分にかなり依存しています。観光は波及効果が非常に大きいので、これから北海道経済を支えていくと思います。そして観光には景観が非常に重要です。

景観は北海道にとって非常に大事で、お金を産む、私たちの生活を支える部分にも関係しています。一方、土木の現状を見ると中々うまく行っていません。景観への配慮があまり無いのではないかということです。

これは美瑛の写真です。この写真だけを見ると、ニュージーランドや北欧のように素晴らしい景観です。この写真に電線や電柱を加えると、どうでしょうか。よくある北海道の景観になります。



これは函館です。観光で食べている地域ですが、街路樹がズタズタになっています。剪定を抑え、電線を抱き込んで、樹形を保って管理することも充分に可能です。



「何故うまくいかないか」ということですが、1つは景観への誤解、共通認識が欠如している。「景観はセンス、主觀なのではないか」「景観配慮はお金が掛かる」と思われている。

2つ目に価格だけで決まる発注システム。いき過ぎた分業体制ということで、高度成長期のなごりもありますが、伝言ゲームのように、設計したものを次の人に渡し、「あとは頼む」と流れてしまいます。あるいは個別に基準があり、基準を守って作ると景観的によくないものもできる。

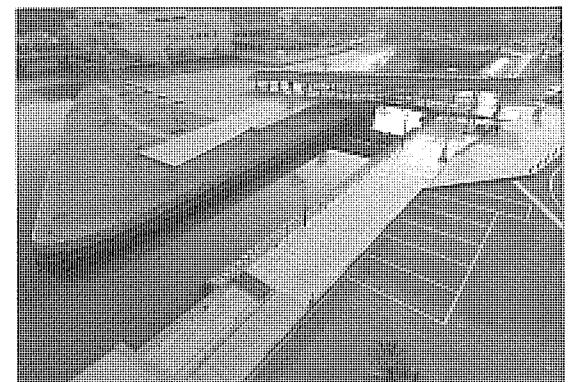
3つ目は行政の問題です。行政の中も縦割りになっていて、その中に景観の専門家がいない。一番大きな問題は、最終的なお客様、クライアントは市民国民だと思います。この景観は今のままではまずい、良くしてほしい、という市民の声があれば行政も動きます。

最後に、今行っている研究です。1つ目は、景観の評価です。どの景観が良くて、どの景観が悪いのか、そしてその理由は何なのか。2つ目は景観向上策ということで、計画段階からどのようにしたら景観がよくなるのか。税金を投入するので、市民の理解が大事、景観を良くしたらどのような社会的効果があるのか、観光客が増えるのか、地価が上がるのか、みんなの愛着や誇りが生まれるのかを研究しています。3つ目には、観光面における景観配慮の重要性の検討。また、地域の景観を生かしたフットパス、道の駅の利用なども検討しています。

○土木デザインの現場と研究(福島秀哉氏)

今日は若い人もたくさんおられるようなので、主に道外の現場ですが、実際に土木のデザインをしている例を紹介したいと思います。

これは堀の周りにプロムナードを作った公園です。宮崎県日南市です。木で表現している所は全部杉です。宮崎県は杉が有名なので、杉を使いたいということで、このような設計を大工さんと一緒にしました。

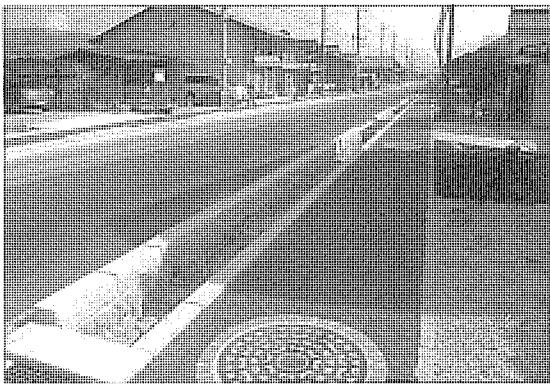


土木の現場は公共空間である場合が多く、誰でも入ることができます。市民の関心が非常に高く、餅撒きの時に集まった市民です。この公園は土木学会デザイン賞の最優秀賞をとっています。



次は群馬県安中市の旧宿場町の道路整備の話です。中央に堀があって、両側が街道になっています。3年かけてこの道路をどうするか、話を続けてきました。

堀の周りだけ石を使い、他の歩道と車道は全部アスファルトでやりましょうと住民の合意を得ました。できたのはこの道路です。見た印象は地味ですが、ここに歩道ができたことを地域の皆さんは喜んでいました。この時、「景観」というとインターロッキングを使ったり、派手な照明を建てたりしなくてはいけないのではないか」と県の職員の方が言っていました。しかし、住民と話し合い、ほしいものを作つて、やれる範囲のことをやれば、結果車道と歩道がアスファルトになった、それが景観整備なのではないかという話になりました。



このような現場で感じたことは、デザイナーは法や基準、特に土木の場合は守らなくてはならないものが多くあります。それらに精通して、現場の職人がわかる図面を書けるかどうか。

次に役所の人、現場の職人、地元の老人など大勢の人と話ができる知識と人間性、きちんとコミュニケーションを取れる人ではないといけない。あとは、土木の現場を理解して景観設計ができる人が少ないので、これからそのような人がでてくるといいなと思っています。

基準と違うことをしようとすると、行政側から反対されます。どうしてもそれをやりたいのであれば、行政に信頼される知識や背景をわかった人ではないと通じないとと思っています。

今までこのようなことをやってきましたが、どうしても大枠で変えられない部分があると思い、この春から国の研究機関である寒地土木研究所に来ました。今は景観の社会的効果について研究をしています。景観整備を行うと、どれだけいいことがあるかを定量的に、

みんながわかる形で示す方法の研究です。これは非常に難しいことです。一部分でもそれを示すことで、行政の中に理解者ができればいいし、コンサルタントの人気が良い設計ができるようになればいいと思っています。

○コメンテーターから(橋場 光氏)

学生の皆さんは「琵琶湖疎水」を作った人を知っていますか。田辺朔郎という人です。東京大学の前身だった学校の学生として、卒業設計に琵琶湖疎水を設計しました。それは北海道から船を使って、瀬戸内海を回って関西まで物資が輸送されていた時代に、琵琶湖を通してそれを京都に持って来るという計画です。建築も土木も未分化なとき、それを学生が卒業設計として挑戦したことは素晴らしいことだったと思います。

学生時代の夢を持って、土木も建築もランドスケープもののびのびと語ってみる。そんなことから、境界領域を突破していくヒントが生まれてくるといい。今日参加されている学生さんたちにはそんなエールを送りたいと思います。

景観のポイントは「中間領域」であると思います。建築と造園あるいは、造園と土木そのような意味での境界領域、あるいは中間領域にアイディアを凝らすことが、いいデザインになっていくと思います。キーワードは中間領域、それを誰が担つて、誰が責任を持って詰めていくか、そこがポイントだと思っています。

空間としてのインターフェイスの中間領域という意味もあるし、公と民という意味での中間領域、都市と農村の中間領域等、中間領域という概念は広く大事なポイントになると思います。

○会場の意見から

会場:修士2年です。松田さんの話を聞いていて、質問したいことがあります。景観の事例写真を見せていただきましたが、景観は「配慮しなければならない項目」なのでしょうか。大学で先生の話を聞いたり、研究室の中で話をしていて、景観は「考えるシステム」みたいなものと理解していました。「景観を良くしたいからきれいになる」のではなくて、「機能を追い求めていくことによって、美しい見た目」になり、それを管理面や行政を含めてよりきれいに使っていくとか、より高めていくこうとして、いいスパイラルが生まれていくことと理解していました。景観をどのように捉えているのかを教えてください。

松田:おっしゃった通りだと思います。機能等色々なことを考えた中で、景観が良くなっていくあるいは良くしていくということなのではないかということでした。野生動物やオリンピック選手、スポーツカー等は美しくて速いです。機能を追及していくと、必然的に機能を満たす形になっていき美しいものになっていく。土木も「必要なもの」として、「機能が発揮されるもの」として作られています。機能を重視していくと、それなり

にはなると思います。ただし性能設計的に自由に作ることができればいいのですが、日本には仕様や基準があり、ルールがあります。それは技術屋を信頼していないシステムだと思います。任せてしまうとどんなものができるかわからないので、ルールを守るように作りなさいということになってしまった。



会場：大学3年生です。電柱や矢羽根等、自然景観を阻害するようなものが海外には少ないとのことでした。どうしてそれらのものが少なくて成り立つのか、いき事例があれば教えてください。また、日本は看板や道案内の標識が多いと感じますがいかがでしょうか。

松田：ヨーロッパは昔ガス灯が照明灯でした。それが電気に変わってきて、電気と競合するようになりました。ガスは地中に埋まっていて、電気は架空なので安く引けるため、競争が成り立たなくなります。そこで電気も埋めるべきだという話になりました。もちろん美観の問題もあります。城壁都市なので電柱を刺す場所も無い、そのような理由があって、ヨーロッパは最初から電線が地中埋設です。道路標識の件ですが、日本は日本人が住みやすいように作っているのです。そんな色々な結果が景観に現れる、景観は環境の総合指標だとも言われています。日本は行政が色々やってしまう、サービス過剰である、そんな国民性の部分もあります。



■参加者からの感想

—第1回、第2回JUDI サロンを通じて—

高橋美香（札幌市立大学デザイン学部4年生）

今回 JUDI サロンに参加させていただき、学校で勉強しただけではわからない現場のことや、普段触れることが無い土木の話などが聞けて非常にいい経験になりました。

私は学校でデザイン全般と、専門で建築やランドス

ケープの基礎の勉強や設計課題などに取り組んできました。今回 JUDI サロンでのお話を聞いて、これまで学んだ学校での取り組みに少し疑問を感じました。ランドスケープの勉強では、実際にそれを作るために必要なはずの土木の知識にあまり触れていない。また、設計課題では、自分の考えで自由に設計をすることができますが、実際はそうはいかない。本来は基準やルールがあるということを今回のお話を聞いてよくわかりました。

第1回のお話では、バブルという時代背景の影響や、行政や技術者が「らしさ」というものを勘違いした結果、おかしなものができてしまったということを伺いました。また、第2回のお話では、デザインの現場では、お金の問題や、縦割り行政の問題、景観の知識が無い方々が多く関わることなど、学校で習わなかった現実が多くあると感じました。

学生にとってこのような貴重なお話が聞ける場はなかなかないので、JUDI サロンのような場はこれからも必要だと思いますし、これからも参加したいと思います。

■今後の取り組み

第1回JUDI サロンは、シリーズの最初ということもあり、土木と建築・都市など北海道におけるこれまでの景観デザイン全体を概観した。第2回JUDI サロンでは、主に土木に焦点を当て、デザインの現場、景観研究をテーマとした。次回の第3回JUDI サロンでは、建築・都市を掘り下げたいと考え、現在準備を行っている。また、20周年事業の締めくくりとして、土木、建築、都市だけではなく、更に幅広い分野を横断したシンポジウムの開催を予定している。

これらのサロン、シンポジウムを通じて、裏テーマである「若手の参加」を進め、これから20年への契機としていきたい。

最後に、3月11日に発生した東北関東大震災は、地震、津波が未曾有の大災害を引き起こし、東日本に大きな傷跡を残した。まずは被災者の方々にお見舞いを申し上げるとともに、現在、各方面で復興に力を尽くされている方に敬意を表したい。

この大災害を契機として、土木や建築、コミュニティの在り方など、都市環境デザインに求められることが大きく変わっていくと予感している。各分野の専門家の知恵を集め、まずは被災地の復興、そして今後の備えとして、全国のまちづくりにおける新しいルールやシステム、デザインが求められると考えている。

多様な専門家が連携する全国組織としての JUDI の役割は大きい。我々北海道ブロックも積極的に取り組んでいきたいと考えている。

JUDI 琉球ブロック 20周年記念事業中間報告

木下 能里子 Kinoshita Noriko 株式会社国建 琉球ブロック幹事

■記念事業にむけて

JUDI 琉球ブロックは平成14年に設置されているので8周年ということになります。その間、一貫して「琉球の美」を大きなテーマとして活動してきました。本土とは大きく異なる琉球の美。その背景にはまず琉球王国としての歴史があり、私たちも常にその歴史に注目することが多かったのですが、今回の「しあわせな風景」という共通テーマの中で、現代の風景を見直してみようということになりました。

沖縄の町並みといえば赤瓦のイメージが強いかもしれません、実は沖縄は全国でも突出して非木造建築の割合が高い地域であり、まちにはコンクリートやブロック造の建物が連なっています。県民はなぜコンクリート建築を志向するのか。

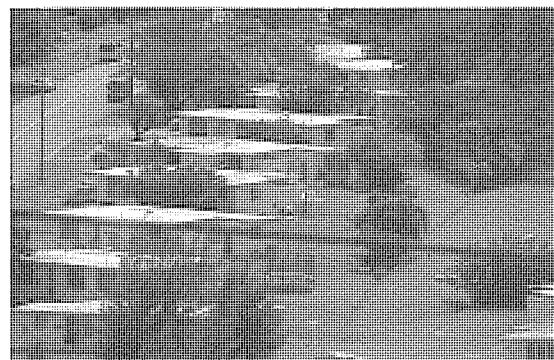
ある意味、「しあわせな風景」にコンクリート建築を重ねあわせてきた県民の心情があるのではないか。そのように考えて、今回の記念事業としてコンクリート建築に焦点をあて、「オキナワ・スタイルの系譜——亞熱帯のコンクリートデザイン」を掲げ、見学会及びフォーラムを開催しました。

■見学会

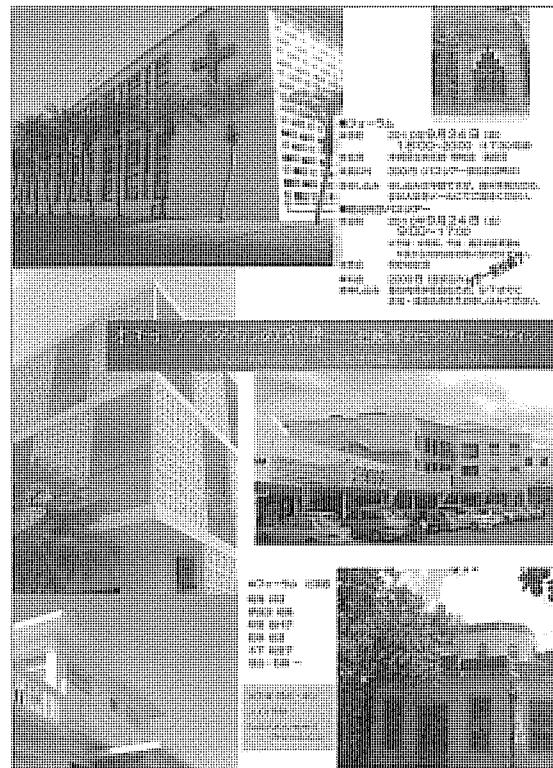
沖縄では戦前のコンクリート建築もいくつかあります、本格的に導入され大規模に使われるようになつたのは戦後です。焼け野原の復興にあたり資材は限られており、また建築技術や生活様式の面でも米軍の影響がありました。

2010年9月24日に行った見学会は、戦後の各時代の代表的なコンクリート建築を訪ねるバスツアーです。ツアーは定員20名、当日来られない人もあり18名の参加となりました。うち3名が県外からの参加でした。

県庁前を出発し、那覇市民会館、旧少年会館など戦後のエポック的建築物を車内から眺めつつ、南風原町にある民間の戸建住宅団地へ。名建築と知られる与那原町の聖クララ修道院ではゆっくり内外を見学し、再び那覇方面へ。花ブロックを効果的に使った新しい集合住宅を見学後、首里城下の新しい街並みを眺めながら、沖縄市に向かいました。



基地内の規格住宅



復帰前に建設され今も人気のショッピングセンター、プラザハウスで昼食後、ツアーのメインであるカデナ空軍基地へ入りました。

基地内は通常入ることができないため、貴重な体験です。建て替えも進みつつあるものの古い建物もメンテナンスされながらまだ使用されており、沖縄のコンクリート住宅の流れが垣間見えました。見学条件により基地内の写真がアップできず残念です。

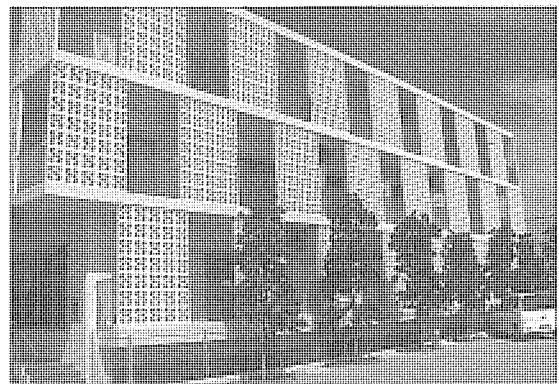
帰りには当初軍人向けに開発された港川外人住宅地に立寄り、カフェなどに転用されている様子を眺めて歩きました。その後本日のフォーラム会場である県立美術館・博物館に向かい、ここでバスツアーは終了となりました。



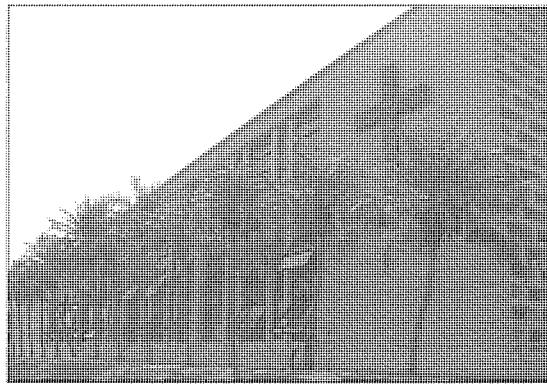
もと米軍将校用専用だったショッピングセンター



コンクリート住宅が一般化したころの住宅団地



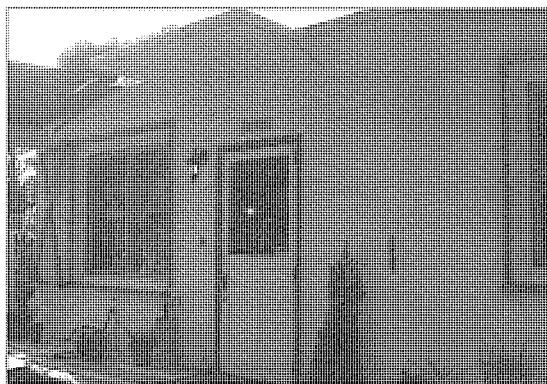
花ブロックを生かした現代的な集合住宅 Casa Villa



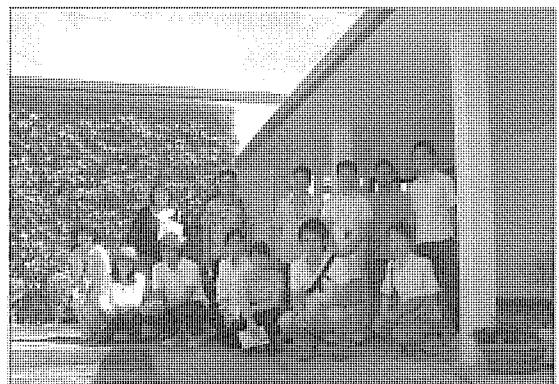
聖クララ修道院。DOCOMOMO100 選



聖クララ修道院内部



外人住宅を転用したカフェ



■フォーラム

バスツアー後、県立美術館・博物館の講座室にてフォーラムを開催しました。JUDIの紹介に続き、コンクリート建築の歴史を紹介。メインゲストの鳴海先生による視点をアジアに広げた講演ののち、沖縄メンバーからそれぞれ話題提供しました。その後短い時間でしたがパネルディスカッションを行いました。参加者は約40名でした。

「沖縄のコンクリート建築史概説」

(新嘉喜 長健 /JUDI 琉球)

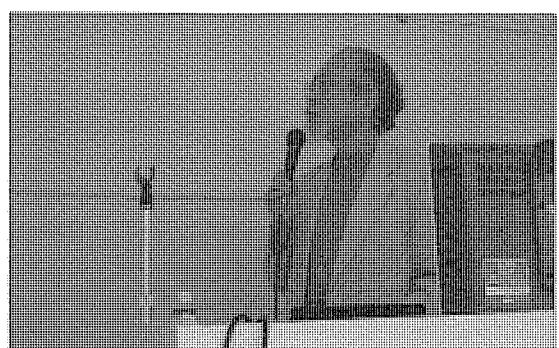
戦前から数例あったものの、本格的にコンクリート建築が広まったのは戦後。焦土となった沖縄での恒久建物の建設は米軍作業から始まった。当初は基地外でも米軍住宅の様式をそのまま応用していたが、次第に沖縄らしさ・気候との調和を打ち出した建築が出現する。

「亜熱帯のコンクリートデザインをアジアの事例から考える」

(鳴海邦穂 /JUDI 関西)

沖縄にはコンクリートを使ったデザインの試みが多い。建築家の活躍の場も多い。

アジアでも現在はコンクリートが席巻しているが、従来からの様式で素材だけを置き換えたものが多い。そもそもデザイン論としてコンクリート建築に焦点をあてた議論が生まれない。そこに関心を持つところが沖縄という土地の面白さではないか。



「オキナワ・スタイルの系譜 /CasaVilla 真地」

(伊良波 朝義 /Guest、建築家)

最近あまり使われなくなってきた花ブロックだが、直射日光を遮り通風を確保するので、コンクリート建築を快適にする素材。プライバシー保護やデザイン性でも、都市居住に合う。全面に花ブロックを用いた自作を紹介。

「風土・コミュニティ・メンテナンス」

(前原信達 / JUDI 琉球)

木造で建設した自宅を紹介。通風を確保した、沖縄の気候に合う建築デザインとしている。閉鎖的デザインのコンクリート住宅が増えているが、家电に頼りすぎず、風土を生かしたデザインを目指すことが必要。自宅は生垣で周囲の環境とつながる、メンテナンスできることにも留意してデザインした。

「沖縄コンクリート建築の行方」

(新里 香代子 /Guest、編集者)

建築情報サイトを運営しており、多くの建築作品を見る。すると素材は同じコンクリートでも、物件によって温かみのあるものと冷たく感じるもの、親しみある気配とよそよそしさ、など、受け取る感じがまったく違う。特に住宅は毎日暮らすところであり、環境が人間に与える影響は大きい。空間の温度・気配・感覚を大切にしたい。

「オキナワ・スタイル×「しあわせな風景」

(木下 能里子 /JUDI 琉球)

外人住宅は高温多湿の沖縄には向かないつくりだが、なぜ人気なのか。そのスタイルがしあわせやあこがれの象徴だった時代があるからでは。明るく開放的な色彩もそのひとつ。トロピカルな色は沖縄の特徴だが、低層のヒューマンなスケールで使いこなすのが似合う。

「パネルディスカッション」

コーディネーター:石嶺 一

コンクリートか木造かという素材に限らず、風土に合った建て方・知恵が大切との意見、観光立県でもある沖縄の財産として戦略的に沖縄らしさをつくっていくべきという意見などがあった。JUDI メンバーとしては初めての取り組みもあり、今後もこうした県内のさまざまな環境デザインを体験し考える機会を設けることを確認して閉会。

コミュニティアーキテクトについてー

藤本昌也 Fujimoto Masaya 建築士 日本建築士会連合会会長
◎聞き手=大川陸+井出建

■この人に聞く[第25回]

藤本昌也さんは連合会会長として多忙な日を送っていますが、UIA2011東京大会が行われる今年を「チャンジ」の年にしたいと考えているのではないかでしょうか。構造計算書偽装事件以降、攻め込まれ足並みの乱れがちな陣営を、地域や建築生産の原点にかえって見つめ直す。そのテーマが「コミュニティアーキテクト」なのではないでしょうか。藤本会長の思想の原点を構成する作品もご紹介いただきました。

コミュニティアーキテクト(CA)について議論を進めよう

CAを考える

今年はUIAの東京大会が9月に開催されます。連合会では「コミュニティアーキテクト」をテーマとしてシンポジウムを開催し、この大会に参加、協力を行います。地域建築士あるいは地域に根ざした建築家という概念は建築士会では広く了解されていますが、今年は、会員の皆さんと年間を通じてこのことを議論し、考えてみたいと思っています。

テーマをとりあえずコミュニティとアーキテクトに分解して考えてみると、建築士には、建築生産に関わっている広い分野の人たちがいます。設計、構造、設備、もちろん施工にも多くの人がおられる。私は建築士といわれる人たちが関わる仕事は、専攻建築士の8つのジャンルだという整理の下で、互いにコラボレートする体制を整えていくことが大事だと思っています。それぞれの分野の専門分化が進み、分化を超えて、分解しているかのように見える時代であるからこそ、総合化の努力、建築を望ましい形で実現するための協力、コラボレートが必要なのだと思います。それによって仕事の領域を拡大できる可能性が広がるのではないかでしょうか。

その協力の仕方について、まだ議論が尽くされていません。建築士でも、たとえば建築設計という統括の立場にある時、建築の全体の過程のなかでリーダーとしての役割がどうあるべきか、建築士会のなかで議論していくたい。どのような活動をし、どのような果実が実ったか、余り見えていません。これが消費者の人たちにも見え、わかるようにしていきたいと考えています。

アーキテクトとコミュニティの関係について

リーダー的な立場に立つ統括設計者の位置づけをはっきりさせるために、あえて建築家というだけでなく「アーキテクト」と呼び、そのアーキテクトが「どのような素養を持つべきか」を議論したいと思っています。デ

ザインビルドのデザイン側のリーダーであるアーキテクトとは何なのか、どのような知識と技能を持つべきなのでしょうか。結論をまず述べれば、地域に根ざして活動する建築

家がアーキテクトです。そこにコミュニティが加わる。もちろん敷地内に限ってもコラボレートするさまざまな職種があり、発注者(クライアント)がおり、場所が設定され、そこで建築生産が行われる。その建築生産に関わるコラボレートと、もうひとつは、敷地を取り巻く社会関係があります。その全体をコミュニティと言つてもいいでしょう。

建築が立地する地域の特性、たとえば地域と材料や素材、あるいは瓦屋根、漆喰壁、建具・格子といった地域の景観要素については多く語られていますが、それをデザインで表現する時に、地域的特色が咀嚼されたか、統括建築士すなわちアーキテクトの表現者としての能力がどのように發揮されているか、議論があるところです。

私たちが地域コミュニティと改めて打ちだす理由は、これから活躍していくはずの若い人々が仕事をしていく「地域」という領域が、コミュニティの場として見た時にさまざまな矛盾を抱えている。この矛盾を解決していくために自分たちの仕事を発見し、解決する能力を身につけなければならない場、それがコミュニティなのだと考えているわけです。

コミュニティの変質

私は現在の日本社会ではコミュニティが崩壊しかなり脆弱になっていると感じています。あるシンポジウムで、住宅を主題にしている人たちのなかから、貧困が問題になつても「ベッド難民」などが議論になることがない、といった発言がありました。住宅政策にまつわる議論のなかでもうした主題は余り扱われていません。しかし、現実には住まいを持てない人があふれてきた。それをコミュニティのなかで解決することができるのでしょうか。

コミュニティという概念は、戦後、私たちがニュータウンをつくってきた成長基調のなかで捉えてきたものと変質しています。コミュニティにおける生活者のニーズがはっきりと変わったということです。さらに申し上げれば、こうしたニーズの変化を踏まえた生活

再編を、ソフトとしてだけでなく空間再編の問題として解決しなければならない事態になっているということです。

そのように大きく考えると社会改革の問題となるのでしょうが、現実には自分たちの足元から始め、身近なコミュニティに絞って考えるべきでしょう。貧困であれば、引きこもりであれ、家庭崩壊であれ、どこにも帰属しない人が結果的にマックスで浮遊している。これがコミュニティの当面している現実の一端です。

日常は、問題や事件が起こらなければ一見何事もなく過ぎていきます。でも、ひとたび何かが起ればコミュニティに内在する問題が明らかに露呈します。これと直かに対面する建築士会の活動があり得るか、と考えることができます。

先日、茨城県の高齢者コミュニティで話をしました。リタイアメントコミュニティとして計画された住宅地です。そこが時を経て、平均70歳を超えた高齢者が近くに住む子育て世代と親しく交わり、そこに暮らす子どもたちをまるで自分の孫のように大事にして生活しているのを見ました。高齢者がさまざまな活動をし、子どもに対しても積極的に手を差し伸べる意志があり活動があれば、高齢者と若い人の循環構造を生みだす可能性があると感じました。

しかし、そこではうまくいっているようでしたが、少子化や高齢化という問題は、郊外住宅地あるいは田園地帯だけでなく、スプロールゾーン、市街地、ダウンタウンに共通するものです。

個人情報の保護が話題になっていますが、コミュニティを理解するには、どこにどういう方がおられるかという情報を共有することで、初めて計画側が関わることができます。個人をバラバラにするのではなく、お互いに知り合うことが条件設定の前提として必要でしょう。

お互いに土地を交換しましょう、小さい土地でも共同に使えませんか、という提案から、もっと重要なのは、大水害や震災があった時に、まずどこに援助の手を差し伸べなくてはいけないか。これは行政だけが情報を持つていればよいことではなく、当然、コミュニティが共有すべき情報ではないでしょうか。

事業という局面

もう一つ、コミュニティ論とアーキテクト論を掛け合わせてコミュニティアーキテクトの素養を考えた時に、計画論と空間論に加え、事業論が不可欠です。でも、たとえ地域の情報を得て、生活再編から空間再編に繋がる計画をつくったとしても、事業を組み立てなければ現実化できません。

その時に市民事業、これは「コミュニティ事業」と言ってもいいですが、地域の潜在力を基盤に、地域の人々が投資するまちづくり会社、たとえば医療生協が主体になり、多くの市民の出資を募って事業を実現している例があります。人々がお金を出し、地域にとって

必要な事業を起こし、それを公共や民間が支援するといった構造です。

東海地方の南、800坪ほどの敷地につくられた「生協のんびり村」は、区画整理事業で換地された土地です。私もいざなは入れてもらう可能性があると活動に共感した地主が、固定資産税プラスアルファで貸したものです。これが事業を成立させる第1の要件でした。生協の方々の積極的な働きかけによって情報が地域内で流通していたこと、地域の人々が相互に意志や意向を知っていることがこの事業を実現する基盤だったのです。

グループホームや高齢者施設は民間経営のものが多くあります。地価の高くなない地方都市でも、グループホーム入居の費用は随分高額なものになっています。しかし、地主や地域住民の参加が広がり、市民事業として成立すれば、年金の範囲に抑えることも可能となるのです。公共は財政が苦しく何もできない、民間は利益の確保が条件になる。そうしたなかで地域の要請に応えるのは、今や社会的セクターによる市民事業しかないのでないかとさえ思えます。

こうした事業の起きたところで、関心を持った建築関係者がどれだけいたか尋ねてみると、ごく少数しかいない。すぐ仕事にならないと事務所はやっていけませんから、初期の段階でのボランティアに近い計画づくりや設計には手が出しにくいかもしれません。しかし、このプロセスにはコミュニティアーキテクトとしての資質、能力を発揮できる大切な手掛かりとなる場があるのでないでしょうか。

経験から学んだCA像

個人的なことですが、私は大学卒業後に大高正人さんの設計事務所に入り、薫陶を受けました。大高さんから何度も教えられたのは「思想をもって建築をつくれ」でした。その仕事のバックボーンとなる思想を自覚せよ、ということです。象徴的なのは、大高事務所の図面には「PAU」と書いてあります。これは「Product-Art&Architecture-Urbanism」の頭文字で、その仕事が、たとえば最初のとっかかりのテーマがプロダクトに関するものであればPの文字が大きい。私が関わった仕事で、当時Pが主題だったのは、木村俊彦さんと協働したプレキャストコンクリートによる建築でした。千葉県立図書館、各地の農協の建物などです。

「広島基町の高層集合住宅」(1978年)では鉄骨のプレアブ化やプレキャストコンクリートのユニット化が大きな主題でした。高層集合住宅は、普通はSRC(鉄骨鉄筋コンクリート)造でやるしかありません。それを純鉄骨ラーメンでやったのですが、通常は費用がかさむことから到底採用不可能とされます。それを可能にしたのは、広島とその近隣の地域産業の潜在力でした。広島は造船業のまちで、多くの優秀な溶接工が育っていました。厚板の溶接が巧みだった。コンクリートも隣の山口県宇部の重要な産業です。

ものづくりは地域と密接に結びついています。地域の優れた鉄骨工場とのコラボレートが実現し、設計だけでなくコンストラクションマネージメントを結果的に行うことができました。まちの地域特性との関係をプロジェクトに活かす、それが成功の秘訣でした。

現在は下請けやサブコンまで成熟し、メーカーが育ち、規格生産型の建設体制ががっちりできています。したがって、規格に当てはまらないものやカタログに載らないデザインはものすごく高価にならざるを得ず、かつての私たちが行った方法は不可能かもしれません。しかし、地域におけるあらゆる資源を動員するという精神は、コミュニティアーキテクトの基本だと言いたいのです。

私は木造建築をつくる際の、材木調達までも含んだ仕組みづくりにも取り組んでいます。いわば“川上”的材木と、“川下”的消費地すなわち木造住宅建設地とを繋げることを実践してみたいと思ったからです。それにあたって田中文男棟梁の協力を得ました。

コンクリートと木造を組み合わせたハイブリッド構造の「つくば市立東小学校」(1995年)は、関東一円の国有林材を使おうという、林野庁の全面的な応援を得たプロジェクトでした。ただ、思い描いたストーリーの実現に向けて多くの問題にぶつかりました。当初は、つくば市の計画・建設を代行した住宅・都市整備公団(当時)が林野庁から材木を購入し、それを支給するというストーリーでしたが、それが思っていたようにはうまくいかずハラハラしました。木造部分の施工を田中文男棟梁に随意契約でお願いすることも、通常の公共発注方式では難しい問題でした。木材の品質管理のために葉枯らし材を使うなど、前もって材木を調達するのも難しい。また、事業が単年度ごとに区切られていますから、地域での合意が入札制度とうまくリンクしないも

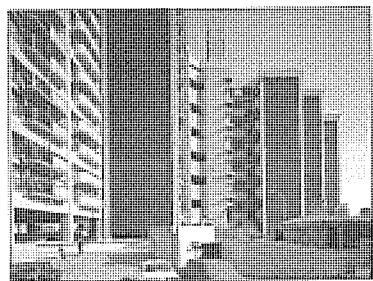
どかしさもありました。

長崎県諫早市の「本野けやき市営住宅団地」(1993年)は、杉を中心とした地場の材木を使った住宅団地です。諫早市が森林組合の山を調べてくれて、材料調達にコンストラクションマネージメントの手法が使えました。工務店が決まる前に材木を調達したのですが、つくば市の例と同様に、地場の材料を事前に調達して支給するのは今の公共発注の制度に合いにくい面があります。構法は伝統構法を基本とし、原則、金物は使っていません。発注する前に学習会をして仕事の内容を説明し、理解してもらうプロセスを踏みました。この仕事ができるのは伝統構法に習熟した工務店さんであることを力説し、このような建築のつくり方を理解してくれる工務店さんがまだ少なからず手を挙げてくれました。

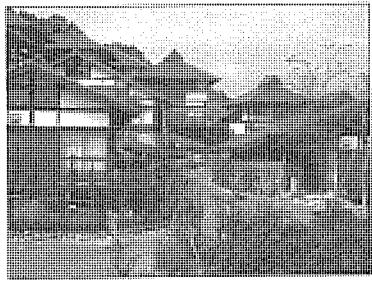
一敷地からのアーバンデザイン

与えられた計画地だけでなく、周りを見まわして建物を設計することも大切です。周辺の建物と応答してどのような「共」の空間をつくるか。建築を設計する時に外周の空間との関係を意識する。つまり、既存の環境であるまちや風景(空間としてのコミュニティ)を意識してほしいと思います。「地」と「図」の空間を意図的に始末をつけて建築をデザインしようということです。アーバンデザインのセンスはアーキテクトの必須の素養です。ブルー系のタイルを外観に用いた青山の「ヨックモック」(1978年)ではそのようなことを意識したつもりです。

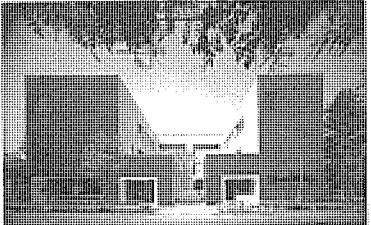
私としては常に「地域に根ざした建築家」、つまり、地域の自然、歴史、生活総体に応答する「コミュニティアーキテクト」としてこれまで仕事をしてきたと思っていますし、今でもそのスタンスを変えることなく、コミュニティ再生実現に取り組んでいるところです。



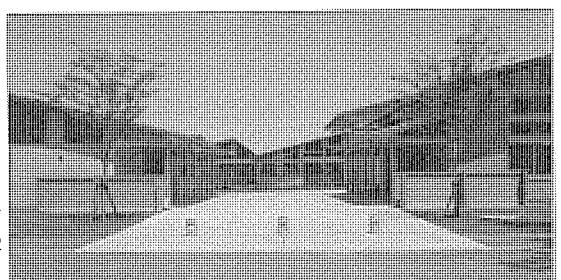
広島基町の高層集合住宅。1978年。設計は大高正人(大高建築設計事務所)。広島とその近隣の地域産業が基盤となって、純鉄骨ラーメン構造が実現に結びついた(撮影:新建築社写真部 Photo by Shin kenchiku-sha、資料提供:建築・空間デジタルアーカイブス コンソーシアム)



本野けやき市営住宅団地。1993年。地場の山の材木を事前調達して工務店に支給し、伝統構法を基本とした住宅が建つ風景をみだした(写真:現代計画研究所提供)



ヨックモック。1978年。周辺の建物よりも低層である特徴を生かして、異色のビューポイントを通りに対してつくっている(撮影:新建築社写真部 Photo by Shinkenchiku-sha)



つくば市立東小学校。1995年。コンクリートと木造を組み合わせたハイブリッド構造の学校建築。材木は国有林材を使っている(写真:現代計画研究所提供)

寄稿:21世紀は環境デザインの時代

中嶋猛夫 Nakajima Takeo 女子美術大学 広報委員会

「東日本大震災」関連の災害で被害を受けられた皆様に哀悼の意を表します。

ところで先日ニューヨークタイムズの記者からインタビュー(日本語で)を受けました。

3年ほど前に私がトヨタプリウスに乗っている関係でハイブリットカーに関するインタビューを受け、次なる時代の車はEV(電気自動車)になると言ったことを記事にしてくれまして、今回の大災害と原発事故による停電などでこれからどうなるかと聞かれたのです。

そこで前からの私の「21世紀は環境デザインの時代」持論を述べました。

英国や日本など近代化された国々の社会システム(政治、経済、教育、都市インフラほか)は19~20世紀に整備され合理的、経済的と言われてきましたが『大規模一極集中型』でもう古いのです、電気を遠くの発電所で作り都市に送電したり、生活用水を浄水場で大量につくり各家庭に送水して下水を処理場に集め、道路も鉄道も都心集中型で渋滞は日常化など近代システムはすでに問題が多く、建設に多額な費用が掛かり、現在は老朽化する事で今後多大なコストが必要とされていて不経済であり、今回のような大規模自然災害や戦争、テロなどによる部分障害でも全体が機能停止してしまいます。

21世紀の社会システムは『小規模自立分散ネットワーク型』に変換すべきで、其の為に新しい技術革新と新産業を育成することが重要で日本が21世紀に生き抜く方法であると述べました。

今回のインタビューはEVに関してなので、現在のEVは発電所でつくった電気を充電するシステムなので過渡的なものであり、将来的には原発を含め大規模発電所などは無くとも済む社会システムにするのが望ましく、これからEV車は『走る発電所』にすれば良いので、それは5~10年ほどで可能です。

その内容は車のボディはソーラー発電皮膜(アモルファス)にし、車の空気取り入れ口に高性能小型風力発電機を複数内蔵させ、外に駐車時は勿論、走れば走るほど風力発電能力はUPします。余った電力は蓄電池に貯め、自宅や会社の電力として利用し又は電力会社に売電出来ます。

家もビルも耐震性を高めた上で、電気は高性能ソーラーと風力発電とバイオマスで賄い、上水は雨水を利用して下水も夫々別々のバイオ浄化装置を設置して使用する『小規模自立分散ネットワーク』すれば夫々の建築や町は安全で、現在の様な大規模インフラの建設と維持監理に膨大な税金を使う必要はなくなります。

日本は19世紀以来、明治維新、第二次大戦、今回の大惨事とほぼ数十年ごと黒船(社会危機)が来襲して、今回の大災害を社会変革をする絶好の機会ととらえ21世紀の新しく豊な社会創りが出来ます。

など私の夢を語りましたら大変面白がってくれ、「将来は明るいですね!」と賛同してくれました。

皆さんも「21世紀は環境デザインの時代」と広く高らかに宣言し、知恵を寄せ協力合って新しい社会システム創りと造形活動に邁進しましょう。

国際委員会報告

服部圭郎 Hattori Keiro 明治学院大学

クリスタ・ライヒャー氏の講演会

国際交流委員会では、財団法人都市計画学会国際委員会と共に講演会を3月4日(金)の18時30分から、明治学院大学白金校舎で行った。講師はドルトムント工科大学の空間計画学部長のクリスタ・ライヒャー教授である。演題は、「ルール地方の転換戦略と将来構想ポストIBAエムシャーパークの地域づくり」。

ライヒャー氏は、20年近く前にIBAエムシャーパーク事業の最初の住宅プロジェクトを設計

し、その後、IBAエムシャーパーク事業のプロジェクトの審査委員を務めるなど深くその事業に関わってきた。さらに、学部長を務めるドルトムント工科大学空間計画学部の総力を結集させて、2008年12月『IBAエムシャーパーク事業の10年後』という本を編集して出版した。同書は、同事業のすべてのプロジェクトを網羅した「IBAエムシャーパーク大辞典」とも言うべきものである。

このように、同事業の裏も表も知り尽くした彼女に

より講演は、4つの内容から構成された。それらは「変容する地域」、「地域の再構築」、「プロジェクト」、「成果と結論」である。以下、その内容を簡単に報告したい。

ルール地方は、ヨーロッパで最も高密度のインフラネットワークを有し、広域都市圏でみれば人口的にも市街地規模でもベルリンを上回る。ただしこの地域は、以前は石炭業と鉄鋼業が栄え、ヨーロッパ最大の工業地域であったが、それら重工業の衰退とともに、雇用も喪失し、同地方の課題としては、工業地域をエコロジカルそして都市的に再生させることが掲げられた。

そして、そのためにノルトラインヴェストファーレン州の構造政策プログラムとして IBA エムシャーパークが遂行された。IBA とはドイツの伝統的な都市再開発手法である。これまで、ダルムシュタット、シュツットガルト、ベルリン(2回)と開催されてきたが、このエムシャーパークでは従来とは異なり、都市ではなく広域的な地域が対象として指定され、また期間も10年間とそれまでのどの事例よりも長期間にわたるものとなつた。IBA エムシャーパークは、「成長なき変革」のモデルというコンセプトのもと、衰退した工業地域の将来を探るための実験場として位置づけられた。17の自治体が参画し、期間を限定して管理・運営組織がつくれられた。コンペによって行うべき事業を決めるのであるが、そこでは質の高さが重視された。これらの事業を実施するための、特別な予算は設けられなかつた。

プロジェクトは大きく6つのテーマによって方向性が定められた。それらのテーマは、「1. エムシャーランドスケープ公園」、「2. エムシャー川の生態系の再構築」、「3. 公園での就業」、「4. 新しい住宅と都市開発」、「5. 産業遺産と産業文化の保全」、「6. 社会・文化・

スポーツ活動のための新しい施設」であった。典型的なプロジェクトとして、デュースブルク市のランドシャフトパーク、デュースブルク港、エッセン市のツォルフェライン鉱、ギルゼンキルフェン市のシェンゲルベルク田園都市、エムシャー川の修復、エムシャーランドスケープ公園などが紹介された。

IBA の成果としては、「1. 新しい都市計画と建築の文化の始まり」、「2. 行政と自治体の組織改革の推進」、「3. 地域のシンクタンク」、「4. 地域の新たなる認識と理解の推進」が挙げられた。IBA は、より市民の参画が推奨され、多くのワークショップが遂行された。そして、それまでは協調することが非常に難しかった自治体が、IBA を契機として協働するようになった。それまでは我が道を行くといった姿勢が強かった各自治体が、ルール地方という広域地域の構成員であるという自覚を IBA は促したのである。その結果、新しい地域アイデンティティの形成に成功し、ツォルフェライン鉱が世界遺産に指定され、また2010年には欧州連合の文化首都に指定されることになった。後者は、文化首都で初めて都市ではなく地域が指定された事例となった。

多くの写真や図を用いての講演は非常に分かりやすく、講演後の質疑応答でも活発な質問が出され、人々の IBA エムシャーパークへの関心の高さを示していた。日本でもルール地方のように産業構造の転換に悩んでいる地域は多い。それらの地域が将来像を考えるうえで示唆に富む講演内容であったのではないかと考えられる。

(注)なお、事前に配布した資料等では、彼女の肩書きをドルトムント工科大学の学長と紹介させていただきましたが誤りでした。この点、深くお詫び申し上げます。

3. 住所変更等(敬称略)

井上 仁 積水樹脂株式会社 街路・住建事業本部
〒520-2596 滋賀県蒲生郡竜王町鏡731-1
Tel.0748-58-1371 Fax.0748-58-1616

作山 康 芝浦工業大学環境システム学科
〒337-8570 さいたま市見沼区深作307
Tel.048-720-6213

菅 孝能 株式会社山手総合計画研究所
〒231-0041 横浜市中区吉田町10
Tel.045-341-0087 Fax.045-261-3022

広報委員会

松村 みち子 白濱 力 加茂 みどり 菅 孝能
岸田文夫 中嶋猛夫 松山 茂 櫻井 淳
横山 あおい 吉田慎悟 島 博司 服部圭郎
横山 裕 作山 康

事務局より

1.新会員の紹介

2011年1月~4月の入会者は下記の通りです。

(入会順、敬称略)

4月30日現在の会員数は、384名です。

正会員

真田純子 徳島大学(四国)

武田有左 +ANET lab.(関東)

準会員

根本春奈 千葉大学大学院(関東)

2.退会者(2011年1~4月)

荒川俊介 倉本 紀久子 小林清泰 田村 良二郎

照井 亮 長崎 駿二郎 永野和邦 松島正矩

宮城俊作 (敬称略)